移住者インタビュー

子育て&起業編

家族で暮らすにほんまつ 周囲に頼りながらの子育て

ほどよい田舎での暮らしは子育て中の「助けて」が言える場所

――小野寺さん家族が移住を考えたのは、第一子の子育てを考えたことがきっかけ。二本松市の中でも市街地の安達地区に暮らしており、現在は第二子も生まれ4人家族。子育て環境はどうですか？

美幸さん「私の実家が二本松市なので、私自身はUターンです。高校卒業後はずっと関東にいたので、Uターンとは言え不安がなかったと言ったら嘘になりますね。でも、少し手が足りないという時に、周囲に頼れるというのはとても助かります。都会では頼れる場所も少なく心細かったので、子育ての一番の悩みが解消されました。屋内遊び場も以前はよく利用させていただいていました。」

――美幸さんが二本松市生まれのUターンで、智行さんは東京生まれのIターンですね。東京や都会と比べると地方のお買い物事情は不便ではないですか？

美幸さん「日常的な外出は近隣で済ませます。安達駅周辺にはスーパーが複数あり、ドラッグストアもあって便利です。家族で外食するときは、車で15分ほどかけてお隣の市（福島市）も利用します。」

智行さん「なんでも揃っている東京が贅沢すぎたと思うこともあります。物もサービスも多すぎると、あっちも行きたい・こっちも気になる・・・、といつまでも満たされない。その点、今の家の立地は、ほどよさがあります。日常の物は揃います。」

――慣れない土地で、今までとは違う仕事・子育てとなると、迷ったり戸惑うこともあるのではないですか？

智行さん「移住に関しての僕の持論で、『そこに住んだことを正解にする努力』っていうのがあるんです。世代の異なる方や二本松市でしか暮らしたことのない人と接することもあるので、価値観の違いを感じることは確かにあるのですが、その土地に住んでいる方々の生き方をありのままに受け入れることも大事だと思っています。移住に限った話ではないですね。人間関係も仕事も、相手や自分自身に過度の期待をしてしまうから、思い通りに行かなかったときに『なんで？』って思ってしまう。それでは、お互いに損。起きた物事に対して、自分自身が対処していけばいいと思っています。」

――最後に、二本松市での暮らしに点数をつけてください。

智行さん「クライアントが喜んでくれるし、家族の笑顔も見れる。暮らしの満足度は100点！……、と言いたいですが、この先も伸びたいのであえて80点にしたいと思います。」

智行さんにじゃれつく子ども達を見ながら、「パパっ子なんです」と美幸さん。智行さんは、自営業の特性を活かして、休みを調節しながら、家族の時間も大切にしている。子ども達のおもちゃに囲まれた部屋は最近引っ越してきた駅近の賃貸。都会で住んでいた頃に比べ、家賃もリーズナブルで間取りも広いという。上の娘さんの就学を見越して、市内でも比較的に子どもの人数が多いエリアに引越しをした。市内には少規模校と大規模校があるため、市内で親族の近くという条件を変えないまま、子どもの年齢や家庭の状況に合わせて子育て環境を選ぶことができる。

二本松市は子育て支援に自信があります

妊婦さん・子育て・学び・若者を本気で応援中。子育て情報や役立つ情報はこちらをチェック！

二次元コードからアクセス！

営業職から一転、にほんまつでクリエイターとして踏み出す

――東京都内で暮らしていた小野寺さんご夫婦が福島県に移住することになったのは、子育てのことを考えたことに加えて、智行さんの仕事への考え方の変化も大きな理由ですよね。

智行さん「それまでは会社で営業職をやっていました。でも10年後の自分を想像した時に、自分で仕事を作ってやってみたい、自営業になってみたいという憧れのようなものがあったんです。農業も検討したくらい。」

――現在フリーのビデオグラファーとして県内を中心に活躍をされていますよね。移住をしてから5年、独立してから2年。自分自身で事業をして収入を得つつ、家族との時間も確保し、移住前に目標としていた暮らしを二本松市で手に入れられている印象です。営業職から全くの未経験だったビデオグラファーとして独立し、県内の企業から声がかかるようになるまで、最初の3年間は『地域おこし協力隊』という制度を活用したそうですが、この制度に応募するまでの流れと感想を教えてください。

智行さん「移住を検討したタイミングで、都内で福島県の地域おこし協力隊の募集説明会が開催されていたので、参加しました。協力隊は任期が最大3年という仕組みで、確かに制度は一般的な求人とは異なります。僕の場合は起業したいという気持ちが固まっていたので、デメリットはあまり感じませんでした。逆算しながら、自分の中で目標を立てていきました。観光PRのお仕事だったので、そのミッションの過程で機材にも触れるようになりました。移住後にこう暮らしたい・何かを事業にしたいというビジョンが明確な方には便利な制度だと思います。」

――妻の美幸さんの反応はどうでしたか？

美幸さん「自営業が想像できなかったので会社員として働いてほしいと思っていました。でも、協力隊が終わる少し前のタイミングでビデオグラファーとしての収入が入り始めたので、こういうものなのだなと気持ちに納得できる面が出てきました。」

智行さん「二本松市の協力隊は副業が認められているので、協力隊としての給与を得ながら、動画制作の案件を受けていました。」

――これから移住をしてビジネスを始めたい方にアドバイスはありますか？

智行さん「自分がやりたいことを貫くのも大事ですが、地域的に必要とされるサービスを提供できることが大切だと感じています。地域に無くて、求められているものをやる。僕の場合は、それが動画でした。」

小野寺さんファミリー

30代のご夫婦と2人の子供の4人家族。東京都出身の智行さんはフリーランスのビデオグラファーとして活躍。二本松市出身の美幸さんは県内の企業に勤めている。

●地域おこし協力隊制度

隊員希望者が都市部から地方に移住し、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PRなどに携わり、地域活性化を目指す取り組みです。

●おためし地域おこし協力隊

隊員のスキルと地域課題、受け入れ団体（勤務先）とのマッチングを図るため2泊3日程度地域に滞在をしていただけます。その間の宿泊費等はかからないため、地域と仕事を体験したい方におすすめです。

●地域おこし協力隊のメリット

研修制度
任期中の家賃補助
任期終了後の起業支援
空き家改修に対する補助など

県内でも制度導入が早く、現在までに20名以上の隊員受入実績があり、OB・OGからのサポートやアドバイスを受ける機会もあります。

移住者インタビュー

単身移住&就職編

はじめての就職先がにほんまつ
自分の夢をかなえた暮らし

やりたい仕事を目指して一直線 初めての一人暮らしのはじまり

――「業界的には、関西の方が企業数はあると思います。・・・でも、来ちゃいました。」とのことですが、滋賀県から二本松市に移住をした経緯を教えてください。

河野さん「きっかけは就職ですね。移住という感じよりも、やりたい仕事に向かってきたら、住んだところが二本松市だった感じです。仕事は染色分野の研究職です。

私はコロナ禍での就職活動の世代なので、どこの企業も面接はオンラインで。そんな中一番最初に採用の通知をくれたのが二本松市の企業だったんです。だから、ここにしようって思って。大学も実家から通っていたので、人生初めての一人暮らしも二本松市ということになります。両親は私が決めたことなので反対はしなかったですね。むしろ、滋賀県から来るということで、採用をしてくれた会社の方が何度も『本当にいいの？本当に？』と。笑」

――滋賀県から福島県だと文化の違いや生活の違い・ギャップを感じたりすることはありませんか？

河野さん「二本松市どころか、福島県、・・・いえ、東日本のこと自体あまりわかっていなかったところがあります。でも、住んでしまえばなんとかなると思って来てしまいました。実際に文化の違いを感じたことはありませんね。」

――二本松市は祭り文化が盛んですが、河野さんのお住まいはまさにその祭りの街ですよね。

河野さん「賃貸に住んでいますが、季節になると祭典費の協力のお願いが来ますね。払っていますよ。住んでいた西日本にも祇園祭があるので、祭りとはそういうものと思っています。祭典期間中はとても楽しませていただいています。」

――食の違いはありますか？

河野さん「飲食で言えば、お米とか野菜とか日常のものが本当に美味しい。料理をするのは好きなので、道の駅に買い物に行くなどして、地元産のものを楽しんでいます。二本松は酒蔵が多いので、実家から送ってくれって言われることがありますね。」

――同世代との繋がりはどうですか？

河野さん「もともと一人でも平気なタイプではあるので、意識的に繋がりを作ろうと思ったことはありませんが、地域内に人が集うお店や場所があるのでそこで自然と知り合いになった方もいます。焙煎された珈琲豆を探して行ったお店で、二本松市の定住支援員さんにも出会いました。そういう偶然の繋がりで、今は満足をしています。」

東京にいながら福島の仕事を探せる！

ふるさと福島就職情報センター
[東京窓口]

TEL：03-3214-9009
E-mail：fturn-soudan@pref.fukushima.lg.jp

ペーパードライバーだったけれど今では日帰り旅行を満喫中

――滋賀県から福島県二本松市へ、就職を機会に住む場所を変えた河野さん。移住でよく聞かれる、東北の冬への抵抗感や実際に寒さ、雪に対する身構えはあったのでしょうか？

河野さん「滋賀県も降るエリアはあるので、雪や冬に対しての抵抗感はありませんでした。

強いていうなら運転は少し心配でしたね。ペーパードライバーだったので。今では、たくさん車に乗っています。この辺りは車線も少なく、煽られたりすることもなく、マイペースに運転できます。渋滞も滅多に起きませんから、運転に慣れていなくても大丈夫だなと。」

――車の運転に慣れてくると行動するエリアも広くなっていきますよね。娯楽などは、どうしても都会に比べて少ないと思いますが、余暇の過ごし方・日常生活で不便さを感じたりすることはありますか？

河野さん「不便なところ・・・、あんまりないんですよね。むしろ楽しいことが多いです。ウィンタースポーツが好きなので、日帰りでスキー場に行ったり。毎週末行くような時期もあります。市内はもちろんですが、裏磐梯にも出かけますね。関西と雪質が全然違ってパウダースノーで楽しいです。あと、温泉も楽しんでいますよ。移住前は、温泉に行くって言ったら、泊まりがけの旅行というイメージでしたが、ここに来てからは、日帰りが可能で、ちょっと行ってこようかな、って思ったら実現できてしまうので、日常が少し贅沢になった気がします。」

――ご自身の望まれた業界に就職され、趣味も充実。地域内の温泉や食べ物を日常的に楽しまれていますね。

河野さん「インタビューを受けるまでは移住って意識はなかったですね。悩むことも少なかったです。きっと、仕事を決めて家を決めて・・・、と淡々と準備したので、逆にそれが身構えすぎず良かったかなって思います。」

カフェ巡り・スキー・温泉などの二本松市ならではの暮らしを楽しんでいる。冬の寒さも「滋賀県と比べて特段寒いとは思わない」とのこと。唯一の不安だった車の運転も、現在はお手のもので公共交通はほぼ使わず、自分の行きたいところに自由に運転をして行くのだとか。

今回の撮影スポット

二本松駅徒歩3分の市民交流センター。
美術館と会議室、こどもの広場がある。

温泉エリアにある『チーズケーキ工房&カフェ風花』さん。移住支援アンバサダーの長田花梨さんがご家族と経営するカフェでもあります。

河野さんプロフィール

滋賀県出身。二本松市の街中エリアに転入。市内の企業に勤めつつ、人生初めての一人暮らしを満喫中。

農業者対談

写真左から弦五さん、大地さん、文男さん、久美子さん

大地さん

弦五さん

久美子さん

ベテラン農家と移住就農者が本音で語る

大地さん「僕はUターンなので、移住ガイドブックに出るのが良いのかと思ったり。でも、二本松市が故郷の自分でさえ、文男さんという存在を知らなかったくらいなので、新規就農者や移住者が師匠と出会うというのは、大変なことだとも思います。」

弦五さん「それは俺も思う。俺たちが『とにかくラッキー』だったのは、文男さんに出会えたこと。研修制度自体は全国あちこちで取り入れている中で、俺たち(研修生)のことを本気で想ってくれる、教えようとしてくれる指導者に出会えたことがここにきて良かったと思える理由の一つ。文男さんとはオーガニックふくしま安達の飲み会で出会ったんだけど、その時にあるスーパーの売り上げ実績を見せてもらって文男さんの凄さがわかった。だから、『文男さんにロックオン!』ってやったの(指で囲うモーションをして)。この人の技術やノウハウや販路の見つけ方、全部を見て盗もうと思った。」

文男さん「有機農業をやりたいって想いを持った若者を応援したいから、そう言うふうに教えてる。全部教える。」

弦五さん「さらっというけど、実はそれがすごいことなんだ。農家の人って経営者だから、農法も販路の情報含めて全部の手の内を曝け出せるかというとそうじゃない人もいるよ。でも、文男さんは違う。」

文男さん「全部教える。冬も暇にならない方法・稼げる方法。稼ぎがなくちゃ、新規就農者はやっていけねぇべ?」

弦五さん「農業者の支援は全国どこにでもあるから、俺たち夫婦もあちこちに行った。でも、大規模なところだと、研修生自体が従業員のような働き方になっていることもあって。雇われて農業をしたいならいいかもしれないけど、独立をするには売り方も経営者としてのやり方も教えてもらわないといけない。制度があることと、独り立ちに向けて一緒に歩んでくれる良い指導者がいることは別なんだなって思った。その点で、二本松市の市役所窓口で出会った職員さんは親切で、文男さんは俺たちが独り立ちできる方法・稼いで生きていく方法を教えてくれる人。」

文男さん「3年間作物を作るノウハウだけやってもダメだから、1年みっちりやったら、次は売ってみるとか、そういう動き方をさせていかないと。農作物を作るだけの3年では独り立ちができない。2年目以降は独立を見据えて動き出す。」

弦五さん「俺たち、全国で5社くらい見ているんだけど、偉ぶらない文男さんの良さって言うのがすぐわかった。」

久美子さん「本当に、誰と出会うか・誰に習うかで、農業のやり方が決まってくると思う。いろんな人に会って、自分に似合うところを探すのが大切。」

大地さん「その点では、オーガニックふくしま安達も良い団体。団体内に農業指導者も複数人所属しているけれど、みんなでまとまっている事で、方向がぶれたり、誰か一人がズルをしようとはしない。」

文男さん「いろんな指導者がいるけれど、新規就農者を自分のところに囲い込もうという、そういう圧はない。来る人が、この人に習いたいって気持ちや、目指す方向によって指導者を決めるといい。」

久美子さん「私たちは、ここに来てからは文男さんだけですが、新規就農者によっては、幅広いやり方を見るために複数の指導者のところにいく人もいます。」

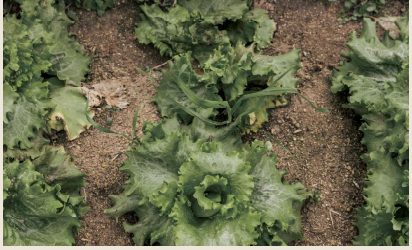
二本松市役所 農業振興課 農政係

TEL:0243-55-5116

オーガニックふくしま安達

有機農業普及の一環として、新規就農者確保、農業後継者確保を目指しています。

農業者対談



――二本松市では多品目を作る農業のイメージがありますが、皆さんはどうですか?

久美子さん「年間を通して、30〜40品目作ってます。今の時期は、にんじん、カブ、大根、そろそろほうれん草ができてくる。季節に関わらず暇にならない。暇っていうことは稼ぐ方法がないということ。文男さんに教わったやり方です。」

大地さん「JA出荷がメインの人は年間の品目は少ないですね。年に2〜3品目くらいなんじゃないかな。僕たちが特段多いのだと思う。そうやって一気に稼ぐ人もいて、要はやり方・何をやりたいかですね。」

文男さん「有機農業の農家が多品目を作る理由は、リスクの分散ができること。1つ2つの品種しか作っていないと、何かが病気になってしまった時に、全体の計画が狂う。稼ぎになりやすいけれど病気になりやすい野菜と、育てやすい野菜と、色々な野菜がある。」

弦五さん「あとね、単純にいろいろな野菜を作るのは楽しいよ。」

大地さん「僕も基本は文男さんに習った多品目ですが、文男さんの計画にはあったけど僕の中ではやらなかったり、やりたくない野菜もあります。作ってて楽しくなかったり、辛い野菜とか。文男さんのところで教わったものをベースにはやるんですが、ちょっとずつ自分なりの感覚も取り入れています。」

研修の指導者

渡辺文男さん

有機農業の第一人者として活躍。若手の育成に情熱を注いでおり、研修生の受け入れに積極的。自宅にはお試し住宅も整備した。

文男さんのところで研修を受けた皆さん

新田弦五さん(写真左)・久美子さん(写真右)

岡山県より夫婦で移住。

菅野大地さん

二本松市岩代地域出身、Uターン。

ちょい見せ!

新田さんの暮らし

移住後も理想の物件を求めて何度か転居を行い、現在は井戸水の出る家を拠点にしている。作った野菜は、大手スーパーと地元の道の駅ふくしま東和に出荷を行っている。

家探しの理想と現実

「田舎暮らしを古民家で」と憧れる方、とにかく安価で家を購入したい方、新築する方さまざまな思いがあると思います。また、空き家バンク=格安のイメージもありますが、なかなか条件に合う家が見つからない場合もあります。全てのケースにあてはまる訳ではありませんが、安く住宅が購入できたとしても改修工事にお金がかかり、結果的に大変な思いをすることも。家探しは慎重に、かつ補助制度も活用しながら住み良い家を手に入れましょう。